

スターフィッシュホテル

2007(平成19)年2月6日鑑賞(東映試写室)



監督・脚本＝ジョン・ウィリアムス／出演＝佐藤浩市／木村多江／KIKI／柄本明／串田和美（ファントム・フィルム、有限会社百米映画社配給／2005年日本映画／98分）

……外国人監督が佐藤浩市を起用し、和洋折衷をキーワードとして作り出したこの映画は、ミステリー派、耽美派、不条理派向けの不可思議な世界……。谷崎潤一郎文学の世界や新藤兼人の『藪の中の黒猫』そして誰もが知っている『不思議の国のアリス』などの世界を目指したミステリー性と映像美はそれなりにグッドだが、大きな欠点はエロティシズムの不足……。武智鉄二監督の『紅閨夢』や『白日夢』とまではいかなくとも、せめて松坂慶子が主演した『桃色』ぐらいいの気色がほしかったと思うのは私だけ……？

ミステリー派、耽美派、不条理派にピッタリ！ スターフィッシュホテルとは？

この映画はタイトルだけでは何の映画かサッパリわからないうえ、脚本・監督もジョン・ウィリアムスというイギリス人。したがって、佐藤浩市が主演していなければ、試写室へ行く気も起こらなかったもの。

また、そもそも「スターフィッシュ」とは「ヒトデ」のことだから、この映画のタイトルは、いわば「ヒトデホテル」。

一体それはナニ、と思ってプレスシートを調べてみると、「会津市内にある白木屋漆器店という大正三年の建物」を「スターフィッシュホテル」と名づけたものの。

したがって、別にこの「スターフィッシュ」に意味があるわけではなく、要は大正ロマンの美しさを残すこの建物（ホテル）が、ミステリー派、耽美派、不条理派好みの映画の舞台としてもっともふさわしかったというだけのこと……。？

ミステリー小説が大好きな主人公は……？

この映画は、第61回毎日映画コンクールで男優主演賞を受賞した佐藤浩市扮する有須ありすが主人公だが、まずはその名前に注目。これが『不思議の国のアリス』をイメージしたものだと気づけば、あなたの感性は立派なもの……？

彼は建設会社に勤めるサラリーマンで、設計事務所に勤める妻ちさと（木村多江）と2人で人並み以上の恵まれた生活をしているが、見たところ子供がいないよう。そのためかどうかは知らないが、彼の出勤の様子や昼休みに1人外に出て、小説を読んでいる姿を見ていると、今は仕事への情熱を失っている様子……？
そう、今彼の楽しみはただ1つ、会社でも家でも、人気ミステリー作家黒田ジョウ（串田和美）が描く幻想的なミステリー小説を読むことなのだ。

しかし、そもそも夜眠る前にミステリー小説を読むなどというのは、頭がおかしくなる原因の1つであることは明らか……？ そんな習慣のためか、有須は夜毎ヘンな夢を見てうなされていたから、ダブルベッドの上で隣りに寝ている妻のちさとは大変……？

キーワードは和洋折衷だが……？

プレスシートによると、「この映画のキーワードとして欠かせないのが和洋折衷」とのこと。つまり、「ジョン・ウィリアムス監督が目指した陰翳の美は、蠟燭がゆらめく影の美しさを讃えた谷崎潤一郎のエッセイ『陰翳礼賛』や、耽美派の泉鏡花の文学、平安の暗闇を妖しく捉えた新藤兼人監督の『藪の中の黒猫』等からインスパイアされたイメージを映画に投影したかったのである」と書かれている。

たしかに、『藪の中の黒猫』は、酒田金時さかたのきんときや渡辺綱わたなべのつな、そしてこれを指揮する侍の棟梁、源頼光みなもとらのひこうらが登場する平安時代中期に、家を焼かれ、侍に犯された百姓の母娘らが怨霊となって復讐する物語（『シネマルーム6』351頁参照）だから、ジョン・ウィリアムス監督がイメージした『不思議の国のアリス』の物語と和洋折衷しようとした狙いはよく理解できるが……。

決定的に足りないのはエロティシズム……？

私は谷崎潤一郎のエッセイ『陰翳礼賛』は全然知らないが、谷崎文学は『鍵』(59年)、『痴人の愛』(49年)、『刺青』(66年)、『卍』(82年)などたくさん映画化されている。耽美主義と言われる谷崎文学の特徴は、何といてもエロティシズム。そしてそれをトコトン徹底させた映画が、武智鉄二監督の『紅閨夢』(64年)や『白日夢』(81年)。したがって、和洋折衷を目指すのはいいのだが、谷崎潤一郎の耽美主義を標榜するのであれば、もっとエロティックな面を強調してほしかったが……。

できれば、中華風のテイストも……？

ちなみに、あまり知られていないから、ジョン・ウィリアムス監督も多分観ていないと思う映画が、50歳を超えた松坂慶子がチャイナ服姿で官能映画へ挑戦した『桃色』(04年)。これは同時期に公開された杉本彩主演の『花と蛇2 パリ／静子』(05年)が注目されたため、ほとんど観客動員ができなかったようだが(?)、中華(台湾)風のテイストをベースにした松坂慶子その他の女優たちの色気はかなりのものだった(『シネマルーム8』272頁参照)。したがって、もしジョン・ウィリアムス監督がこれを観ていれば、和洋折衷の上に中華風のテイストもプラスしようと考えたはずで、そうすればより密度の濃いエロティシズムが醸し出されたかもしれない……？

謎のウサギ男がキーパーソン……？

人間がさまざまな動物のぬいぐるみを着て登場する映画はたくさんある。印象的だったのは、韓国映画『春の日のクマは好きですか?』(03年)や、ぬいぐるみを着るバイト姿が面白かった『サッド・ムービー』(05年)。ぬいぐるみの中身は人間だとわかっているけど、ぬいぐるみを着ることによって何となくミステリー性が深まるから不思議……？

この映画でそんなミステリー性を高めるキーパーソンとして登場するのが、あの芸達者な柄本明扮する謎のウサギ男。彼は昼休みにベンチに腰かけて本を読む

でいる有須の傍に座って話しかけたり、妻が失踪し失意の日々の中、屋台で冷酒を飲んでいる有須の傍にきて話しかけたり、何かと有須に接触してくるが、それは一体なぜ……？

会員制クラブ、ワンダーランドは？

この映画には象徴的な舞台としてスターフィッシュホテルが登場するが、それとは別に妖しげな会員制クラブ「ワンダーランド」が登場する。これは、ちさとが失踪した後、謎のウサギ男から渡された案内状によって知らされたもの。

その案内状には、艶かしい姿をしたちさとの顔写真と共にワンダーランドの文字が……。

それを見た有須はすぐにワンダーランドを訪れたが、「会員制」をタテに入店を断られたのは意外……。だって今ドキ、東京の銀座でも大阪の北新地でも、いくら会員制を謳っている一流クラブでも、客の身なり・風体を見て、これは大丈夫と判断すれば、一見客でも入店させるのが普通。ところがこのワンダーランドは、一見紳士風なボーイが現れ、丁重に有須の入店を「拒否」したからビックリ。しかし、妻のちさとがこの店の中にいるに違いないと思い込んでいる有須は、かなりヤバイ手段を使って店内へ……。妖しげな雰囲気の店内には色っぽい女性がたくさん……。そして、あるところではSMショーまがいのプレイも……。その中で有須は、中国語を話す女性にちさとのことを問いつめようとしたが……。

有須の不倫相手も神秘性がいっぱい……？

近時は不倫小説が大はやりで、渡辺淳一の『愛ルケ』（06年）はその代表。したがって（？）、この映画でも、妻ちさとと幸せに暮しているはずの有須の不倫相手が登場する。その女性が佳世子（KIKI）だが、ミステリー小説大好き人間の有須の不倫相手にふさわしく、約2年間肉体関係が続けているにもかかわらず、彼女の正体は有須には全くわからないまま……？ そんな佳世子と有須がはじめて出会い、肉体関係を持ったのが、北国のスターフィッシュホテルだった。

この佳世子は、有須の勧めにもかかわらず、東京に引っ越して有須にとっての「便利な女」になることを一貫して拒否しているから、どうも不倫の現場は、有

須が佳世子のために時間をかけて出かけて行っているところらしい。もっとも、この設定は『愛ルケ』でも当初は同じで、今はかつての輝きを失っている小説家、村尾は冬香とのデートと肉体関係のために、わざわざ新幹線に乗って日帰りしていたことは周知の事実……？ そして、それくらいの距離感が続いていれば、多分あの小説のような結末は迎えなかったはずだが、冬香の夫が東京に単身赴任することになったため、冬香は村尾にとって「便利な女」になるとともに、冬香も村尾にのめり込むことになったもの……。

その意味では、有須との不倫関係を適度な距離感で継続していくについて、佳世子が、自分のすべての姿を隠す、そして、東京に住むことによる有須にとっての便利な女にはならないという方針を堅持したのは、きわめて賢明な選択……？

ストーリー性を追及してはダメ……？

この手の不思議な耽美ミステリー映画を楽しむコツは、ストーリー性を追及しないこと。彼は今何をしているの？ なぜそうなるの？ などといちいち理屈っぽく考えていたのでは、この映画が目指している理想を理解することは到底ムリ……？ 妻ちさとの失踪、ワンダーランドの火事、その中で発見された数名の骨。果たして、その骨はちさとのもの……？

有須が必死に追及していく中、少しずつ明らかになってくる事実はホンモノ、それとも幻想の世界……？ そんな訳のわからない物語(?)が、謎のウサギ男をキーパーソンにして展開されるが、その行き着くところが黒田ジョウによる新作『スターフィッシュホテル』の発売。そのタイトルとされているのは、まさに有須が初めて佳世子と出会った北国のホテル。そして、その小説の中に書かれてあるのは、有須が体験してきたことばかり……。こりゃ一体なぜ……？

そんなこんなの Why をいっぱい抱きながらこの映画を楽しむことができれば、あなたは一流のミステリーファン……？ しかし、私はどうもその資格はなさそう……？

2007(平成19)年2月7日記